

# 大阪平野杭全神社の連歌

## ——文献の調査と実作の継承——

鶴崎裕雄

### 王朝文学の流布と継承に見る連歌

毎月催される杭全神社の月次連歌の宗匠の一人である光田和伸氏は「連歌の発生は二人で詠み合う唱和詩にある」<sup>(注)</sup>という。連歌は前の句に新しく次の句を付け、付けた句にまた新しく次の句を付けるというように、次々と句を付けて行く、まさに唱和詩の連続であり、古代の男女が山や市に集まって歌を詠み合ったという歌垣<sup>うたがき</sup>は代表的な唱和詩である。このように連歌の歴史は古くて長い。

大和朝廷の成立期から奈良時代にかけて五・七・五・七・七の短歌が歌の主流となると、五・七・五の上句と七・七の下句を二人して詠むようになった(短連歌)。平安時代の王朝文学、それは和歌に代表されるのであるが、連歌は和歌に育まれて成長した。『拾遺和歌集』には六つの短連歌、『金葉和歌集』には一七の短連歌が収められている。また歌物語には連歌

が要因となって展開する話がある。その一つ、『伊勢物語』では別れを惜しんで血の涙を流す男に斎宮は「徒人の渡れど濡れぬ縁あれば」の上句を詠み、男は「また逢坂の関は越えなむ」と返した。

さらに時代が進むと、上句・下句を幾つも続けるようになり(長連歌)、鎌倉時代には百句続ける百韻連歌が盛となった。百韻連歌には一〇人から二〇人、時にはもっと多くの人が寄り合って前句に付け句を付けて楽しんだ。参加した人を連衆<sup>れんじゅう</sup>と呼ぶ。南北朝時代には、流行する物の一つとして「京鎌倉ヲコキマゼテ、一座ソロハヌエセ連歌。在々所々ノ歌連歌。点者ニナラヌ人ゾナキ」という落書<sup>らくしよ</sup>の記録がある(『建武年間記』)。京都や鎌倉で流行する好い加減な連歌を皮肉った風刺であるが、それほど連歌は人々の間で流行したのである。この時代、二条良基は連歌を和歌に匹敵するまでに質を高めようとし、それを受けた宗祇や肖柏・宗長・宗牧たち、連歌師の活躍した室町時代はまさに連歌の黄金、量質ともに充実した時代となった。

連歌の流行は江戸時代まで続いたが、質の向上のため、あまりにも堅苦しい連歌に対し、もっと気楽に、日常的に楽しもうという動きが興った。

俳諧の誕生である。芭蕉や蕪村・一茶たちは江戸時代の都市や農村で歓迎された俳諧師である。一方、寄合の文芸の首座を俳諧に譲った連歌は、神社や寺院の奉納<sup>(注2)</sup>や祈祷のため、また城内の連歌の間で年中行事や式典の一つとして詠まれた。江戸城では毎年正月十一日、幕府お抱えの連歌師里村家の面々が京都から出向いて柳営(幕府)連歌が行われた。大きな社寺には連歌殿が設けられていた。各地の名所を描いた名所図絵の神社や寺院には連歌所または連歌殿なるものが描かれている。

しかし明治になると連歌も俳諧も全く流行<sup>は</sup>らなくなってしまい、連歌や俳諧の最初の句、発句から独立した俳句が、短歌とともに盛になった。江戸時代に社寺で行われていた祈祷連歌や奉納連歌の機会は減少し、昭和期になると連歌所や連歌殿は社務所の一部に移築されたり、取り壊されて会館や式場に、中には駐車場に様変わりするようになった。そうした中で、杭全神社の連歌所は全国唯一の、連歌のために現存する建造物である。

### 杭全神社の連歌所と連歌復興

ここに紹介する杭全<sup>くまた</sup>神社は大阪市平野区平野宮町に鎮座し、牛頭天王と熊野権現を祭神とする古代以来の神社で、中世の自治都市として知られる摂津国平野郷の惣社・産土神である。

杭全神社の境内を入ると拝殿の向かって右手に連歌所がある。<sup>(注3)</sup>間口二間

半・奥行き四間半の入母屋造瓦葺の木造建築物で内部は北側に一二畳の主室があり、中央に縦長四畳分の板の間がある。平素はこの板の間には畳が敷かれているが、連歌会には板の間となる。正面奥には巾一間・奥行き半間の床の間があり、連歌会当日はここに牛頭天王と熊野権現の神影二軸が掛けられる。主室に続いた南側に襖で仕切られた四畳の控えの間がある。境内に面した連歌所の西側には蔀戸があり、東側には内縁があつて前栽に開け、垣根越しに平野の環壕へと続いている。

杭全神社の連歌所が創建された年代は不明であるが、延宝七年(一六七九)の「三十六歌仙図扁額」があつて、これを掛けたであろう連歌所がこの年以前には存在したと考えられる。宝永五年(二七〇八)「連歌所再興願書」が出され、享保四年(二七一九)の棟札があり、現存の連歌所はこの時に再建されたものである。

平成十一年(一九九九)大阪市指定文化財となつたのを契機に、再興以来約三百年振りに大修理が行われ、平成十二年十一月に始まり、平成十四年三月に完成、一年四ヶ月に及ぶ大工事であつた。

これより前、昭和六十二年(一九八九)五月、全国にも珍しい連歌所のある杭全神社を会場にして浜千代清氏と島津忠夫氏の連歌についての講演会、続いて連歌所において歌仙連歌(三十六句)一巻の張行が行われた。

浜千代氏は近代に連歌を繫<sup>つ</sup>ごうとした山田孝雄氏の門下で長年実作に携つてこられた研究者であり、島津氏は古典文学、特に連歌研究の著名な第一人者である。この時の歌仙連歌は「楠若葉待ちし宮居の手向け哉」という五・七・五の各句の頭に「く・ま・た」と詠み込んだ島津氏の発句で始ま

た。

その年の七月、島津氏と杭全神社宮司の藤江正謹氏に鶴崎も加わって連歌会の継続を話し合い、九月、福岡県行橋市の今井須佐神社の高辻安親氏の「言の葉の色づきそむるまどるかな」の発句で杭全神社の奉納連歌復興は産声を挙げた。毎月開かれていた杭全神社の奉納連歌は、平成五年（一九九三）『平野法楽連歌―過去と現在―』に纏められた。この『平野法楽連歌』の出版によって藤江氏は神社本庁の神道文化会より神道文化奨励賞を授与された。平成六年五月一六日の『神社新報』掲載の、この時の受賞の概要を紹介しよう。

杭全神社宮司藤江正謹氏（大阪市・『平野法楽連歌』）

藤江氏は、中世から続き、奉納が途絶えてゐた「連歌」を復活、定着させた功績と、平野連歌の過去の資料を発掘し復活の軌跡を辿った書の出版が評価された。昭和六十二年、市民の会「平野の町づくりを考える会」の活動で連歌を勉強することになったが、杭全神社には連歌所といふ建物が残ってをり、そこでの開催と、作った連歌は奉納するといふ「法楽連歌」の復活を試みた。「法楽連歌」は現在では年間数回に互って開催され、人々の間に定着。神社を中心とした文化のなかでもまれにみる「連歌」の復活・定着は神道文化にふさはしい内容で、注目を集めてゐる。

かくして杭全神社の連歌復興、奉納連歌復興が公的に認められたのである。

### 杭全神社の過去の連歌資料☆

右の受賞の概要中「平野連歌の過去の資料」とある。杭全神社に伝わる連歌の過去の資料にはどのようなものがあるのか。すでに堺市立博物館図録『都市の信仰史―堺開口神社と平野杭全神社―』に幾つかの資料の紹介があり、さらに島津氏の詳しい紹介があり、平野区誌編集委員会編『平野区誌』にも杭全神社連歌の記述(注7)がある。これら、特に島津氏の連歌資料の紹介を参照にして、新たに和歌の資料も紹介し、杭全神社奉納の和歌・連歌の特徴を考えてみたい。

①慶長十四年（一六〇九）正月三日 山何百韻、一卷発句「年ののはの子

日を見せぬ小松哉 昌塚」連衆、昌塚・正休・昌傑・甫・玄陳・友勢・慶純・春重・宗順・道柏・久園・英知・了恵・寛佐・宗之・宣滋。

②元禄十一年（一六九八）三月六日〜八日 千句連歌 打鬘俵紙

- |           |                 |    |
|-----------|-----------------|----|
| 第一 松花・山何  | ませはまして神や見はやす松の花 | 昌陸 |
| 第二 霞・御何   | 空の海も南やわきて春霞     | 昌礼 |
| 第三 桜・三字中略 | 猶たのむい陰は千本の桜かな   | 祐可 |
| 第四 郭公・何路  | 山を出て声みやひたり郭公    | 正俊 |
| 第五 納涼・玉何  | 涼しさの姿を見る柳かな     | 広行 |
| 第六 萩・何壩   | 此夕にしきやさらす萩盛     | 宗通 |
| 第七 月・千何   | 道遠し移して里に嶺の月     | 宗伴 |
| 第八 雁・何田   | 雁の来るあきにはこゝも常世かな | 令直 |

第九雪・何船 筆の跡を学ふや雪に朝鴉 宗静

第十神楽・唐何 国の中うるはしく照燎かな 宗春

追加永日・朝何 末長く曇らぬ御代の春日哉 達賢

この千句を収める箱の表書きに「御領主六十御年賀」とあるが、この年、元禄十一年、平野の領主柳沢吉保は四十一歳である。箱と千句連歌が誤って収められているのか。

③宝永三年（一七〇六）奉納三百首和歌、一卷源（河瀬）菅雄・土橋宗信・末吉宗伴・楠宗成らが名を連ねる。跋に「……此里のおなし心なるとち又かの門にあそへる人々なと三百首の題をさくりて一卷となし此津の国平野の御社におさめ奉るを頻繁蘊藻のことはりにならひてよと父のおしへにまかせてかくなん／宝永三<sup>丙</sup>戌年六月下旬／撰津国平野之住／土橋友直敬白」とあり、当時、大坂で手広く歌道の指導していた河瀬菅雄（一六四七〜一七二五）を招いて平野の文人が題詠三百首を「我里の産神」に奉納したのである。

④享保六年（一七二二）五月上旬 神前一日千首和歌、一冊（列帖）序は種徳庵末吉氏宗伴、春二百首、夏百首、秋二百首、冬百首、恋二百首、雑二百首、跋は醉露堂源菅雄。

⑤享保六年（一七二二）五月上旬 神前一日千首和歌、二冊（袋綴）

④神前一日千首和歌の草案本で上下二冊。

⑥享保六年（一七二二）十一月晦日 病人祈祷之連歌百韻 卷子一卷

発句「影たのめ雲はれて見む神無月 宗信」独吟

内題に「奉納平野郷社御宝前／病人祈祷之連歌」とあり、病氣平癒を

祈った連歌であることがわかる。宗信の独吟。宗信は土橋氏。

⑦享保九年（一七二四）十一月十一日 千句、懐紙

第一 松花・何路 植し世をしらすや神の松の花 増勝

第二 霞・三字中略 跡みれば霞踏こし野筋哉 増勝

第三 花・初何 石はしる滝や守人山桜 増勝

第四 郭公・千何 声のあやは闇にもしるし子規 増勝

第五 納涼・花之何 涼しさは夕をまたぬ木陰哉 増勝

第六 露・白何 露散て村雨なひく竹葉哉 増勝

第七 月・夕何 たか宿も我物かほの空の月 増勝

第八 菊・何鳥 つむ菊もきのふは薄し朝匂ひ 増勝

第九 雪・薄何 寒さをもうつめる雪の詠かな 増勝

第十 神・何人 その駒や心のにれる豊の庭 増勝

（追加はなし）

序は「末吉増勝のぬしは予の竹馬の友にして……元文五年霜月はじめ

土橋宗信」とあり、跋に「すへて願ひの道は末とけならんこそあら

まほしけれ。こゝに末吉増勝君はいとけなかりしよりつらね歌の道を

断ひ給ひ……庚申歳仲冬 中瀬常興、「此しりつさ予もことはをくは

へしるし置てよといふ人ありければ／言の葉やうつまて残す雪の杜／

宗伴敬書」とあって、連歌の興行は享保九年（一七二四）十一月で、

十七年後、元文五年（一七四〇）土橋宗信・中瀬常興・末吉宗伴が序

と跋を書いて杭全神社に奉納されたのであろう。

⑧⑨⑩享保十二年（一七二七）一つの包み紙に三種類の三三枚の短冊、

包み紙には「享保十二末年／奉納千句発句短策十一枚」とあるが、別に元文四年（一七三九）の包み紙がある。

⑧短冊の上四分の一の枠に竹模様、句の上に「千句第二」など

第一 平野社千句巻頭 たひらけく野は成にけり春霞

法眼昌迪

第二 忘れては又うくひすの初音哉

宗伴

第三 四方山の花に千さとの駒もかな

宗信

第四 露に色かす玉苗のみとり哉

正臣

第五 今日ほぬさも水にとれるや御被川

友政

第六 日くらしのこゑはかくれぬ木の間かな

常興

第七 名のまこと有て曇るな秋の月

法橋清順

第八 しほれてもちらぬをきくの色香哉

宗伯

第九 ふゆかせのさはりの何か神の梅

宗珎

第十 平野社千句巻袖 白木 綿も幾世ふけ来ぬ松の雪

昌寮

追加 幾ちしほ染んこと葉の初紅葉

亮海

⑨⑧と同じ短冊。句の上に題を記す。

第一 平野社千句巻頭 子日 かせも松を引ことふきの子日哉

昌迪

第二 梅 おらて梅かさせる袖の句哉

宗伴

第三 春月 さやに見しは物かは月の薄霞

宗伯

第四 余花 春にます色にわか葉の山桜

芳充

第五 蝉 すゝしさもあつさも蝉のなくねかな

綱利

第六 立秋 そよと告くけふより秋や萩の声

好直

第七 稻葉 靡きふす稻葉は国の姿かな

宗政

第八 砧 うちうたす誰もえぬよの砧哉 宗信

第九 水鳥 冬枯の芦間に鴨の青羽かな 亮海

第十 摂陽平野郷社頭千句巻袖 神楽 継てうたふ屋敷ひさし神の庭 昌林

追加 千句追加 かゝれとて松や高けん藤かつら 立余

⑩縞模様植物の下絵の短冊

第一 摂津國平野郷社頭千句 たて、誰か身も栄へなむ門の松 昌林

第二 峯つゝき残れる雪やむら霞 良慶

第三 若草のつまも馴にし雉子哉 正美

第四 植るより秋を手にとる早苗哉 宗政

第五 ゆふたちの染しか木ゝの深みとり 舒成

第六 朝霧の八重垣つくる砌かな 資俊

第七 もみち葉もにほへる山の桜かな 布草

第八 蛭なく音にしるき夜寒かな 常行

第九 見る月はさはらぬ冬の木間哉 亮映

第十 明日は春と思へはこそあれ年の暮れ 宗伴

追加 世こもるは歳へむ竹のわか葉かな 常興

⑪享保十五年（一七三〇）証誠殿瑞夢記同夢想開連歌 二卷

証誠殿瑞夢記の箱表に「文 桜井正三位氏敦卿筆／外題 久世黄門通

夏卿筆／奥書 風早三位実積卿筆」、箱裏に「奉寄付于撰州住吉郡

平野郷 社中連歌所／証誠殿瑞夢記一軸御執筆如表題／岨享保十三

戊申年十二月廿九日同郷産医家十二次法橋奥野清順敬白」、証誠殿夢想連歌

の箱表に「奉納于撰州住吉郡平野郷社連歌所／証 誠殿夢想之連歌

一軸」とある。

夢想之連歌 享保十五年（一七三〇）三月七日興行

発句「粟ちらす数の神歌手向へし（無記）」脇「水穂の国にたねを

蒔つ、祐範」第三「雨かせも長閑なる世は時なひて清順」連衆、祐

範・清順・宗伴・正純・宗伯・宗信・栄信・増水・綱利・正信・宗孝・

常興・映山・有仙・覚永・立余・亮海・元行。

⑫享保二十一年（一七三六）二月五日宗伴病氣祈禱連歌百韻、玉何、懐

紙、発句「末久にまもれ花見む神の松 宗伯」連衆、宗伯・宗信・栄

信・芳充・綱利・好胤・資俊・政勝。

⑬元文元年（一七三六）十月二十日何木百韻、打袋懐紙 発句「神国の

すゝしきみせよ森の松 保長」独吟。

⑭元文二年（一七三七）十二月七日平野庄権現宮連歌千句 懐紙

第一子日・何路 幾子日神にひかれて老の春 宗伴

第二霞・薄何 山にても嵐をかかぬ霞哉 良弘

第三花・何色 されはこそ人もとひけれ花の宿 宗信

第四郭公・何鳥 ほとゝきす待を心の初音かな 常興

第五納涼・手何 木陰など秋ならなくにあきの風 宗伴

第六一葉・白何 先ちりて露をも誘ふ一葉かな 宗信

第七月・何人 出てる見る我やくまなる野への月 良弘

第八菊・一字露頭 梅も後を畏れん菊の色香哉 宗伴

第九雪・初何 中く埋まぬ雪の高根かな 常興

第十神楽・千何 影も世々つまで明くけき燎かな 宗信

追加下何 霜の上にならざりし間や薄紅葉 常興

打ち曇り懐紙、桐箱、蓋に「平野庄権現宮連歌千句懐紙并追加／執筆

道清書」とある。次の⑮の冊子（列帖）の平野庄権現宮連歌千句と同

じ。

⑮元文二年（一七三七）十二月七日平野庄権現宮連歌千句 一冊（列帖）。

第一百韻から追加八句までは⑩の懐紙であるが、前後に序と跋を記す。

序の冒頭は「撰津の国住吉の郡杭全の郷、今は平野といふ。此郷はそ

のかみ牛頭天王影向ならせ給ひ、中つころ熊野證誠権現降臨まし／＼

しより此二はしらの御神をいたゝきまつることゝはなりぬ。そも／＼

大和言の葉は神代よりつたはれる道にして、四方の社の手向草……」

とあり、跋には「郷社法楽御座の連歌千句満待りて宝前におさめ奉り

ける巻の奥にこゝろさしをのふとて／法橋良弘上／絶やらぬたむけは

うけよつくは山しけきめくみの陰あふきて」とある。各百韻の、発

句と初折表は増勝の独吟、初折裏から二折裏は増永・正純・宗信・玄

春ほかの独吟、三折以後の連衆は宗伴・正臣・清順・常興・常知・正

純・増永・友直・兼利・玄春たちである。

⑯元文四年（一七三九）正月二十二日唐何百韻 懐紙、発句「万代やい

のるこゝろの松の春 宗伴」連衆、宗伴・政房・正純・増永・宗伯・

芳充・綱利・好直・宗政・宗信・正実・宗孝・野成・資俊・包白・布

草・清順・常興・法船・昌映・覚永・立余・亮海・為孝。

元文四年（一七三九）に関しては「元文四未年／奉納千句発句短 策

十一枚」という包み紙がある。これは⑧⑨⑩が収められている同じ箱

にあったので、享保十二年（一七二七）の⑧⑨⑩と同じように他にも千句と追加の発句の短冊があったものと思われる。

⑰元文五年（一七四〇）九月独吟千句連歌 懐紙、末吉宗伴独吟。

- 第一何路 神やもりて後あるまつの若枝哉 宗伴
  - 第二初何 ひなつれてやとれ驚世々の竹 宗伴
  - 第三唐何 咲つかん花見よとてや老の春 宗伴
  - 第四何人 植そへてひろくなる我門田哉 宗伴
  - 第五何草 はらへして絶ぬは清きなかれ哉 宗伴
  - 第六何袋 つたへふけ涼しき初今朝の風 宗伴
  - 第七 二字反音 友いたくなきてすからぬ男鹿哉 宗伴
  - 第八朝何 月とともにすむらむやとや千の秋 宗伴
  - 第九 白何 冬しらてこゝも山路や菊の庭 宗伴
  - 第十山何 うたへ末かかくも経まくはとの声 宗伴
  - 追加何風 松にそふ菊や千とせの花のたね 宗信
- 追加の連衆、宗信・宗伴・増永・知清・宗能・宗政・正清・常興
- ⑱元文庚申（五年 一七四〇）宗伴独吟千句 袋綴一冊。⑰の宗伴の独吟千句と同じ。序と跋があり、跋に「十月井上正臣識」とする。
- ここに一つ疑問があるが、それはこの⑱の袋綴本の第七の発句が「類多く鳴てすからぬ男鹿哉」とある。⑰の懐紙の「友いたく」は読み難い書体である。これを袋綴本に書き写した時「類多く」と読み間違たと推測する。⑱の「類」では音読みとなつて訓読みを主とする連歌には相応しくなく、賦物の二字反音も⑰の「友」の方が「元・本」となつ

て納得できる。ただしこうした間違いは何故起こるのだろうか。宗伴は近くにいるだろうし、興行と書き写との時間差はあまりないであろう。何か私（鶴崎）の理解に誤りがあるのであろうか。

⑲寛保元年（一七四一）奉納千句発句短策（短冊）一一枚

- 第一 若水 若水のおものも三のわか哉 宗伴
  - 第二 蛙 諸声になくや蛙も歌の友 増永
  - 第三 桃 まで桜園生はもゝの花盛 宗伯
  - 第四 水鶏 水鶏なくねさめ夜深き朝戸かな 宗信
  - 第五 夏月 氷ある池かと涼し夏の月 網利
  - 第六 萩 萩にきけ松やは高き風の音 宗政
  - 第七 初嵐 山にてもあきは秋なりはつ嵐 舒成
  - 第八 露霜 つゆ霜のあとやむらこの野辺の色 常興
  - 第九 鴛 浪のあやを浮寝の鴛のふすまかな 亮海
  - 第十 笹 地にしくや冬はあられたまかしの 昌林
  - 追加 五月雨 五月雨のあまりふる軒やしのふ草 正臣
- ⑳寛延二年（一七四九）正月十三日 御賀何路百韻 打袋懐紙。発句「祈る世や神のまにく千々の春 幽治」連衆、幽治・増永・宗伯・舒成・良慶・直言・宗能・宗政・正員・宗孝・資俊・布草・常興・常行・常元・保悟・自本・光映・智永・覚永・亮映・正勝。
- ㉑寛延三年（一七五〇）奉納千句発句短策（短冊）一一枚
- 第一 立春 二はしら神の春立つとり居かな 昌林
- 第二 柳 佐保姫の手染か雨の糸桜 宗伯

第三 兒鳥 その声の匂ひや花のかほよ鳥

舒成

第四 若楓 人もかく見えよ老木の若楓

良慶

第五 扇 空にしらぬ雪を手にとる扇哉

宗能

第六 七夕 秋の来て秋なき星の契り哉

宗政

第七 霧 霧もその八重垣つくる砌かな

保悟

第八 柀 言の葉の色もまさきのかつらかな

常興

第九 残鷹 居る鷹のさはかぬ冬の水田哉

亮映

第十 神楽 庭火たく影さやかなる霜夜かな

宗森

追加桜 一本も心や千種花桜

増永

㉒宝暦二年(一七五二)二月二十五日。八百五十年聖廟法楽千何連歌

打曇懷紙。発句「天満る神のためしや代々の梅 増永」連衆、増永・

宴清・宗能・宗政・四良三郎・徳太郎・永五郎・小菊・増・正勝・長

佐。

㉓明和七年(一七七〇)六月十八日 懐旧百韻懷紙。発句「香をしとふ

橘は幾むかし人好問」連衆、好問・用成・重栄・正長・宗城・長道・

益利・宗名・正勝・宗智・増伴・元映・保民・宗政・資俊・常元・由

景・尚書・立永・良光・龍瓊・宿応・宥伝・惟明・誠成。

㉔天明五年(一七八五)六月七日 朝何百韻懷紙。発句「山鳥の尾や永

き世の神祭 光円」連衆、光円・用成・宗城・長道・実輝・由頼・泰

成・正敏・知義・由景・宗名・増伴・惟明・常住・宥応・方教・方空・

分為。

㉕天保九年(一八三八)六月十八日 懐旧之連歌百韻懷紙。発句「手向

もや世々の末つむ花筐道一」連衆、道一・常見・宗義・宥賢・正道・  
常倫・宗考・道定・保園・保興・恵信・道房・直温・宥信・乙之助・  
正々・道礼・矩福。

### 杭全神社奉納和歌・連歌の特徴

以上、杭全神社蔵の奉納和歌・連歌の一覧である。和歌・連歌合わせて  
二十、この内、和歌は三、連歌は十七、ただし和歌は④と⑤が同じ作品な  
ので二作品、連歌も①と②が同じ作品なので十六作品となる。この一覧よ  
り注目したいこと、興味深いことを少し考えてみたい。

まず年代を見よう。①は最も古く慶長十四年(一六〇九)の連歌。特徴  
的なのは②、③の元禄十一年(一六九八)から宝暦二年(一七五二)まで、  
およそ半世紀の間であり、この江戸時代前半、上方の経済が盛となり、そ  
れに伴って文化の発展した時代である。大掛かりな百首歌や千句連歌が奉  
納されている。この後、④と⑤は明和七年(一七七〇)と天明五年(一七  
八五)、⑥は天保九年(一八三八)である。

二には和歌と連歌の数量を挙げたい。和歌も連歌も奉納された作品すべ  
てでないのは当然であるが、一応この数量によって考えてみると、和歌に  
較べて連歌の奉納が圧倒的に多いことである。連歌よりも和歌を優先した  
であろう一般的な詩歌の中で、連歌の数が勝るのはそれだけ杭全神社では連  
歌が重視された、末吉家や土橋家など平野の人々は連歌に関心が強かった  
のである。これが近世における平野の、そして杭全神社の特徴である。

三にこうした和歌や連歌の興行に注目したい。和歌は③の三百首和歌、④の千首和歌というように大掛かりな興行である。しかも④は列帖の装幀で、別に同じ⑤が袋綴の装幀で奉納されている。連歌も②⑦⑧⑨⑩⑭⑮⑯⑰⑱が千句連歌であり、⑭の懐紙とは別に同じ⑮が列帖の装幀で、⑰の懐紙とは別に⑱が袋綴の装幀で奉納されている。⑧⑨⑩⑮⑱は発句だけの短冊であるが、なにしろ千句の割合が高い。平野郷の豊かさが窺われる。

四には⑥と⑫の病氣平癒の祈祷連歌の二例である。⑥は宗信の独吟で、土橋家身内の病人の快復を祈ったのかの。発句の「影たのめ雲はれて見む…」には祈念の雰囲気漂っている。⑫は「宗伴病氣祈祷」とあって平野衆による宗伴のために祈祷連歌か。具体例の少ない病氣平癒の祈祷連歌である。五には②の元禄十一年（一六九八）の千句連歌、桐箱に入っている箱の表書きに「御領主六十御年賀」とあるので、これは領主の六十歳の祝の千句連歌となる。しかし元禄十一年の平野の領主は武蔵国川越藩主の柳沢吉保で、元禄七年から宝永元年（一七〇四）まで領主であった。ただしこの元禄十一年は吉保は四十一歳で六十の賀を祝う歳ではない。これは②の千句は間違った箱に入ってしまったのである。間違いはとにかく、箱の表書きのように、領主の六十の賀を祝う連歌が行われたことに注目したい。江戸時代を通して平野の領主はたびたび変わるが、天領以外の時、関東の武蔵国川越藩・上野国高崎藩・下総国古河藩の藩主が領主であった。住民は遠く離れた領主の賀を祝ったことになる。幕藩体制下の遠距離の領主に対する領民の意識を伺う思いがする。

今回、発句とその作者をできるだけ詳しく紹介した。これは杭全神社の

奉納連歌を主導する人々、それは平野の在郷町の中心人物たちの資料を提供しなかったからである。これは連歌を奉納の第一とする杭全神社の特徴でもある。今後の研究に役立てば幸いである。

### 現在の杭全神社連歌

前述のように平成五年（一九九三）『平野法楽連歌―過去と現在―』の刊行後も、杭全神社では毎月連歌会が続けられていて、一五人から二〇人ほどが集まる。四月上旬の日曜日には満開の桜の下で花の下連歌が開かれる。この時は全国からの参加者もあって、連歌を巻き上げた後、参加者ごぞって神前に参拝し、宗匠が連歌を読み上げる。まさに奉納の連歌である。はじめ宗匠は浜千代清氏であったが、浜千代氏没後、島津忠夫氏・藤江正謹氏・光田和伸氏と鶴崎が交代で宗匠を勤めている。

連歌が珍しいということで、各地から招かれて連歌興行を公開することもある。いわば連歌実作の出開帳である。これまでの記録を見ると、平成十三年十一月二十三日大阪市立美術館、平成十四年十一月二十三日伊丹市柿衛文庫、平成十六年三月二十五日東京の国立能楽堂、平成十七年十一月二十七日伊丹市柿衛文庫、平成十九年十二月二日岐阜市歴史博物館など（注）である。このように杭全神社の連歌は盛であり、連歌や和歌・俳諧の研究者である島津忠夫氏・大坪利絹（坐忘）氏・安藤武彦氏・光田和伸氏が連中として参加していることも杭全神社連歌の大きな特徴である。

最後に杭全神社連歌の最新の作品の一つと現在盛になった各地の連歌会

の花の下連歌を紹介したい。

平成二十一年十二月二十二日 於杭全神社瑞鳳殿

宗匠 島津忠夫・執筆 戸田佳

賦何文連歌

新しき年のいそぎの宮居かな

若きはふりべ白き息の緒

ゆく雲は尾上に雪をかがふりて

海にあまたの魚まねくとや

旅の道風は苦屋にただ強く

訪ぬる里も肌寒き頃

ほのうすく玉とばかりに夜の月

色なき萩のにはひこぼるる

初ウはろばると広ぐる原に這ふ煙

鐘こころせよ狩衣の君

たはむれの誘ひにさへも揺るるやも

古き思ひとけふの思ひと

ひめぐとは墨跡悲し結び文

婚の前日まえばに使ふ湯の音

大宮を降りて江戸の月寒し

この菰ばかり防ぐ身ごろも

失せもの見当たらずぬま時まのすぎ

聴あるころの道に出でたる

いづくまで続く野末か八重霞

谷を渡るかうぐひすの声

咲き乱れ諸人招く花ごころ

知るや知らずやこのまほらまを

名オ虹の果てみ仏の国めざす船

波の下にも都さぶらふ

琵琶の音は闇のそこひを貫きぬ

走れぬ嘆き星赤くして

我が意気は山をおほひて余りあり

明治を今にせむ術ア如何に

移る世も雲居は常の姿にて

うるほすごとく降りつづく雨

先送りして誰のため民のため

待てども悲し前渡る門

こぼるるは秋か涙かしのびねの

信太の杜の薄生ふらむ

月の出を狐親子が仰ぎ見る

眉もりりしき夢の桂男

名ウ沢水はみな海原へ下りつつ

行く雲凝りて風を起こせる

学び舎ににぎはひの声夏盛り

和伸

裕雄

善帆

康代

みのり

正謹

淑子

規子

正純

一希

坐忘

正謹

善帆

淑子

裕雄

みのり

典央

隆志

淑子

和伸

一希

洋子

鶏もいつの日鳳となれ

裕雄

かぐはしき名のある家に生れ出で

規子

新葉のかがやきひとときは目立つ

直美

直会や神に賜はる福の花

みのり

菟連ねてのどかなる郷

佳

島津忠夫

一

竹島一希

三

末吉洋子

二

藤江正謹

二

小林康代

二

筒井紅舟

一

村田隆志

二

松村淑子

四

高柳みのり

四

山村規子

三

小林善帆

三

大坪坐忘

二

小村典央

二

西田正純

三

戸田佳

二

鶴崎裕雄

四

大利直美

二

光田和伸

二

平成二十二年、各地連歌会の花の下連歌（賦物と発句・脇・第三の三物のみ）。

3月30日 平野法楽連歌の会

於大阪市 杭全神社

賦何衣連歌

つどふ友 待つばかりなる 宮の花

島津忠夫

枝高きより 清きさへづり

藤江正謹

水分の 流れの 裾は かすみゐて

村田隆志

4月1日 古河連歌の会

於栃木県 万福寺（連歌師兼載墓所）

賦御何連歌

川の面に 菟新らし 花の寺

永田文吉

左筑波の けやき芽吹きぬ

立右和正

若駒の いなく牧を 訪ね来て

中川弓子

4月2日 三重連歌の会

於三重県 椿大神社

賦何心連歌



大阪平野 杭全神社 花の下連歌

花吹雪 御子を導く道ならむ

鶴崎裕雄

入学祭の果てしなき夢

山本行恭

あげひばり 雲のまにまに さへずりて

垣野晴子

4月2日 平野図書館連歌の会 於大阪市杭全神社  
平野区

賦何路連歌

神垣や花はかざしの歌筵

藤江正謹

春風吹けば さざ波の空

赤川修次

うららかに 潮路あまねく 日をうけて

松田絹代

賦何風連歌

神垣や花はかざしの歌筵

藤江正謹

春の斎庭に 鳥のこゑこゑ

矢野加寿

遠霞 つらなる山に 広ごりて

林 茂達

4月4日 京都連歌の会 於京都市東寺観智院  
南区

賦唐何連歌

ひんがしの みてらに集ふ 花の友

島津忠夫

錦織りなす 青柳の糸

鶴崎裕雄

つばくらめ あまつおほざら とびかひて

岡子まり絵

賦何路連歌

ひんがしの みてらに集ふ 花の友

島津忠夫

五百重のしだれ 光る下風

筒井紅舟

国原は あり処かすまぬ 波挙げて

光田和伸

4月19日 今井祇園連歌の会 於福岡県片山牡丹園  
行橋市

賦何屋連歌(例年通り牡丹の花の連歌会)

春享けて 花芽立ちけり 二十日草

片山豊孝

片山陰に 舞へるてふてふ

有川宜博

水清く 広野やうやう 霞むらん

山下喜代子

注

(1) 光田和伸氏「連歌の流れ」『岩波講座 日本文学史』6 岩波書店 平8

(2) 奉納連歌については島津忠夫氏「法楽連歌と奉納連歌」『島津忠夫著作集』第二巻連歌 和泉書院 平15 参照。

(3) 東野良平・林野全孝氏「杭全神社連歌所について」『日本建築学会近畿支部研究報告集 平成九年度、林野全孝氏「杭全神社連歌所調査報告」』『大阪の歴史と文化財』創刊号 平10・10参照

(4) 杭全神社編「平野法楽連歌―過去と現在―」和泉書院 平5

(5) 堺市博物館図録「都市の信仰史―堺開口神社と平野杭全神社―」堺市博物館 昭57

(6) 島津忠夫氏「法楽連歌の現在 付、杭全神社の連歌資料」『会報 大阪俳文学研究会』21 昭62・9(後、「島津忠夫著作集」第六巻 天満宮連歌史 和泉書院 平17)、「杭全神社蔵の連歌資料」『平野法楽連歌―過去と現在―』前掲

(7) 平野区誌編集委員会編「平野区誌」平野区誌刊行委員会 平17

(8) 島津忠夫氏「島津忠夫著作集」第十三巻 作品 和泉書院 平19所収「連歌張行―国立能楽堂企画公演―」などに詳しい。

(9) 拙稿「平成二十二年の花の下連歌」連句誌『れぎおん』70 二〇一〇年夏